

特別支援学級の指導体制の改善

～一人一人に合った自立活動の指導を目指して～

見附市立田井小学校 教諭 山谷 光平（平成20年度）

1 主題設定の理由

見附市立田井小学校は全校児童が46名の小規模校である。私は令和4年度から教務主任を兼務しながら、初めての特別支援学級（自閉情緒学級）担任となった。この年に、県立教育センターの新任特別支援学級担任教員研修をする中で、自分自身が見通しのないまま指導や支援を行っていることを痛感した。特に、当校では、自立活動の目的や活動内容が曖昧なまま進めており、どのように計画し、取り組めばよいのか悩んでいる教師が周りにもいることが分かった。

そこで、令和5年度からは特別支援教育コーディネーター（以下、特支 Co）としての立場を生かしながら、児童の実態や当校の特別支援学級の実情に合わせて、児童一人一人の成長につなげる校内の指導体制を改善したいと考えた。

2 目的

特別支援学級の児童一人一人の成長につなげるよう校内の指導体制を改善する。

3 実践

次の4つの点を実践し、校内の指導体制を改善する。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 児童の自立活動における「指導すべき課題」の明確化(2) 特別支援教育運営計画の作成と活用(3) 自立活動年間指導計画の作成と活用(4) 合同自立活動の計画立案と実践 |
|---|

4 実践の様子

(1) 児童の自立活動における「指導すべき課題」の明確化

これまで個別の指導計画を作成し、児童の実態から支援を考え、成長につなげようと責任感をもって指導をしていた。しかし、児童の実態の捉えや適切な指導ができているかについて不安があり、課題の整理が必要だと感じていた。そこで、児童一人一人に合った指導や支援を行うために、特別支援学校学習指導要領自立活動編を参考に、担当教師で客観的事実を共有しながら自立活動の指導と照らし合わせることで、「指導すべき課題」を設定することにした（別紙資料表1）。

昨年度の引継ぎを含め、校内での情報共有は、4月初めの職員会議「子どもを語る会」で行った。また、それぞれの学級担任が5月末までに作成する「個別の指導計画」に向け、実態把握を行った。その作成についても関係職員で情報共有を行いながら作っていくこととした。「個別の指導計画」が提出された後に、職員会議で時間を設け、実態や目標、手立てを全職員で共有した。さらに週に1回ある職員終会における「子どもを語る会」では、子どもの気になる様子を全職員で共有し、児童に必要な支援策を検討し、改善を図るようにした。

(2) 特別支援教育運営計画の作成と活用

田井小学校で初めて特別支援学級（自閉情緒学級）を担当した一年間は、教育活動がどのような流れで進むのかがはっきり分からず、見通しをもつことが難しかった。教務主任を兼務しながら毎日の授業実践や、一人一人への対応などすることも多かったが、子どもを確実に成長させるためには、見通しをもつことが必要だと強く感じた。そこで、1年間の特別支援学級の動きと校内委員会

の予定等をまとめた特別支援教育運営計画を作成することにした。(別紙資料 表2)

この計画は、新潟県教育委員会の「令和5年度改訂版 特別支援学級ガイドライン」を参考にした。ポイントを絞り、確実にできることに重点を置いて取り組むことにした。これまで、前期と後期の評価の時期に指導や支援について見直しを行っていたが、確実な指導とするために8月末にも校内支援委員会を設定した。ここでは、前期の取組について振り返り、実態把握・支援方法を改めて見直す機会となった。A児の個別の指導計画の変遷は以下のとおりである。(別紙資料 表3)

8月末に行った校内支援委員会で、A児の指導計画を主に2点変更した。転校当初、不安を感じると大きな声で助けを呼ぶA児にとって、「日常生活」においても「対人」においても助けの求め方が解決すべき課題であった。だんだんと落ち着いて行動できるようになったA児は「対人」に関しては目標を「友達とのかかわり」に変更した。算数の授業では繰り返し指導したことで数字の書き順も身に付き、「正しい手順での計算」を新しい目標とした。その後、後期における変更点は、少人数における授業でのヘルプの出し方が適度な声の大きさになって安定したので、指導や支援方法の「①授業内で困ったときには、小声で助けを呼ぶ」をカットした。そして、「対人」に関する指導や支援方法「友達と一緒に遊ぶ」がA児にとってハードルの高い内容であったので「担任と一緒にゲームの練習やルールを覚える」に修正した。夏休みという余裕のある8月に「2学期からの支援をどうするか」という話し合いを行って見直したからこそ、目標の修正や具体的な支援につながった。

(3) 自立活動年間計画の作成と活用

学習指導要領において、各教科は目標の系統性や扱う内容の順序性が明示されている。その一方で自立活動は、内容に順序性はなく、教師が必要と判断した内容のみ扱う。つまり、教師が実態を把握した上で、どのような自立活動の指導が必要になるのかについて考える必要がある。しかし自立活動には教科書がなく、何をすればよいのか私にはよく分からなかった。毎時間の教科指導の中で、必要感を感じて自立活動の指導を取り入れたり、教科指導がひと段落した授業の後半で自立活動を行ったりしていた。その場で自立活動の内容を決めていたため、その時の課題には正対していたかもしれない。しかし、3つの学年を同時に指導することもあり、一人一人の目標を常に意識してそれぞれの自立活動を行うことは難しかった。そこで、A児の実能を踏まえて、A児に合う形で計画的に指導ができるように自立活動年間計画を作成した。(別紙資料 表4)

自立活動年間計画では、月ごとの活動に加えて、常に意識できるように目標と支援の欄を入れて作成した。月ごとの自立活動の大枠を捉えることができ、見通しをもつことができた。また、同じ活動をするにしても児童によってねらいが異なるため、一緒に活動するそれぞれの児童のねらいを整理することで、私自身が見通しをもちながら意識して自立活動の指導をすることができた。A児は体を動かすことをあまり好まず運動経験が乏しいため、手の動きや体を動かす大きな動きを経験してほしいことやゲームに他の児童と一緒にになって楽しむことをねらって計画を立てることができた。

(4) 合同自立活動の計画の立案と実践

4月の転入から半年以上がたち、A児は学校生活にも慣れ始めてきた。担任や交流学級担任とも信頼関係を築き始め、見通しをもって活動に参加するようになった。困った場面での正しい行動を丁寧に指導することでパニックになって大きな声を上げることも少なくなっていた。しかし、パニックの様子を見せてしまった後ろめたさから自分に自信が持てないA児は、自分から友達に話したいことや遊びたいことで声を掛けることはなかった。

当校の特別支援学級には、10や100の数の構成が分からない児童や周りの気持ちを考えずに自分のやりたいことを優先してしまう児童、自分に自信の持てない児童など、A児以外にも様々な課

題をもった児童がいる。本単元を通して、知的学級と自閉情緒学級の一人一人の課題を解決するために、エコキャップボトルを集計・提供し、見附市内の施設を巡る校外学習「ONE Team ピクニック～力を合わせて一丸となってやり遂げよう～」を計画した。

- ① 単元名「ONE Team ピクニック～力を合わせて一丸となってやり遂げよう～」
- ② 単元計画（知的学級児童3名も含めた全7名）
- ③ 抽出児童A児について

(ア) 本単元におけるA児の自立活動の目標（指導すべき課題）

特別支援学級以外の人に慣れ、落ち着いて一緒に行動したり、自分の考えや気持ちを相手に伝えたりして進んでかかわろうとする。

(イ) A児の実践の様子

全校児童からこの活動に興味をもってもらうために、特別支援学級児童がエコキャップの総数当てクイズを用意し、A児を含めた全員でエコキャップ集めの協力を全校に呼び掛けた。特別支援学級全員で手分けをしてエコキャ

| 学習活動 | | ★指導上の工夫 留意事項 |
|---|-------------------------------|---|
| ○エコキャップを集めるために全校に呼び掛ける。エコキャップ集めを呼び掛ける便り作成して配付する。 ○全校に向けたクイズを作成する。 (自閉情緒学級中心の活動) | ○エコキャップの集計をする。 (知的学級中心の活動) | ★全校が取組を意識できるように楽しめる企画を計画する。 ★知的学級と自閉情緒学級のかかわりが生まれるように、活動における役割を決めて分担をする。 |
| ○みんなで話し合っ行き先を決め、バスの乗車時刻やお土産を調べる。 | | ★生活経験を豊かできるように、市内循環バスを活用や買い物を活動に組み込む。 ★全員で達成感を味わわせるために全員の希望をとり、行き先を決める話し合いを設定する。 |
| ○市内循環バスに乗り、エコキャップを届けることを目的としたピクニックに行く。 | | ★全校とのかかわりを生むために、市内のスポットに立ち寄り、校内で紹介する。 |
| ○振り返りをする。 | | ★全校とのかかわりが生まれるように、振り返りの声を生かして掲示物を作成する。 |

ップを教室で数えていると、通常学級の児童も「一緒に数えさせてください」と活動に協力し始めた。その輪の中に入るようA児に声を掛け、丸いテーブルを囲んで、学級の話題で盛り上がりながらA児も会話しながら作業することができた。A児と1つのテーブルで100や1000のまとまりを一緒に作るかかわりが増えていき、A児から「ありがとう」という感謝の言葉が出てきた。交流学級児童と一緒に数えた活動はその後も続いた。また、A児はイラストを描いたり、キャラクターを作成したりすることが好きなので、この活動のキャラクターの考案を依頼し、「キャップキング」というキャラクターが誕生した。このキャラクターをきっかけに普段話すことのない友達にA児が「ぼくが描いたんだよ！」と話し掛けて、会話が生まれた。

ピクニック当日は、事前に活動の中でコミュニケーションをとる場面に見通しをもてたことで、バスの乗り降りの際の挨拶、施設での代表の言葉、買い物でのやり取りなど、A児はかかわった人たちと落ち着いてコミュニケーションを取ることができていた。大型遊具や工作スペースを備えた屋内施設「プレイラボみつけ」では、置いてあるおもちゃを手にとって友達と一緒に遊び、普段はしない鬼ごっこにも参加することができた。また、ボルダリングやネットを登って2階に行こうと挑戦するなど、魅力的な遊具や走りたくなるような環境から、アクティブなA児の姿が見られた。

④ 合同自立活動の実践のまとめ

本単元を通して、個々のねらいを踏まえて支援を行うことで、知的学級の児童も自閉情緒学級の児童もねらいとする姿を見ることができた。特に、人とかかわりが課題だった自閉情緒学級児童は困っている人に気付いて手を差し伸べたり、通常学級の児童と一緒にエコキャップを数えたりする姿が見られた。

活動前にA児とは「どンドン人とかかわろう」というめあてを確認した。代表の挨拶等の役割を全員で割り振ってかかわる機会を設定した。事前に施設の中の様子や1日の流れを細かくシュミレーションしていたこともあり、大きなパニックもなく活動を終えることができた。A児は「いろんな施設の人や友達と話せて、めあてを達成できてよかった」と話していた。活動後、全員で学んだ

ことや感じたことを振り返り、活動や施設の様子を紹介する掲示物を担任が作成した。(別紙資料 5) 通常学級の多くの児童が活動の様子や施設の紹介をした掲示物を見て、A児に施設の様子について質問している場面が見られ、新たにかかわりを生む機会にもなった。

本実践でかかわるようになった児童との触れ合いが継続するように、学習室をけん玉やこまの昔遊びや様々なカードゲームを用意して遊び場に変えて紹介したところ、毎日のように児童たちが集まるようになり、交流の場となっている。

5 成果と課題

(1) 成果

特別支援教育運営計画を作成し、8月に個別の指導計画を見直したことで、児童をより丁寧に観察する機会も増え、それぞれの児童に対する適切な支援へのつながりを感じることができた。児童の支援方法に悩む職員がいれば、研修を通して全職員で支援を考え、職員間の連携が深まった。

また、自立活動を一覧にして年間計画を立てたことで、一人一人に合った目標を意識しながら、見通しをもって自立活動に取り組むことができた。例えば、年間計画を立てたことで4、5、6年生の3つの学年が同時に自立活動をしていても、それぞれの求めているねらいに合った単元を組み合わせることができた。

A児については、人とのかかわりが増えたことで、自分から遊ぼうと声を掛ける様子が見られるようになった。特に、外国語活動などのアクティビティのある学習活動や休み時間でも、いろいろな友達に声を掛けるようになった。日々の学校生活ではパニックになることがほとんどなくなって教育活動に最後まで参加できている。学習面でもかけ算やわり算を「自分一人で問題が解けるようになって嬉しい」と話すなど、自分の成長を実感している様子も見られるようになった。そして、学級内でもボールを使ったゲームに誘われて「やってみようかな」と参加するなど意欲的な姿が見られるようになった。

(2) 課題

自立活動は常に実態を丁寧に把握することが大切である。その後の指導により、どのような状況になるかは教師の力量にかかっている。教師が成長した分、児童も成長する。私はまだ、特別支援学級担任3年目である。これからも研修をし、一人一人のニーズに合った支援が提供できるようにしていきたい。また、管理職に促されてから年間計画にない校内特別支援委員会を管理職に促されてから開くなど、特支 Co として校内委員会の機能を十分に発揮できていないと感じている。校内特別支援教育の中心としての役割を確実に果たすために努力していかなければならない。

今回の実践で校内の枠組みができてきた。これから一人一人に合った自立活動の指導を目指すために、特別支援教育に関する講師を招いた校内研修を開くことで、学校全体の特別支援教育に対する「質の向上」を目指していきたい。

6 まとめ

児童の実態は常に変化し成長していく。それに合わせて、教科書のない自立学習においては何をどのようにすべきかについて、自分で判断していかなければならない。初めて特別支援学級の担任をすることになったとき、私は何をしたらいいのか分からず、常に不安を感じていた。この不安を拭うためには、年間の見通しをもつことが有効であった。また、実態をよく見るときには周りの教師の情報共有が必要不可欠であり、職員同士の話しやすい雰囲気も重要であることが分かった。今後も特支 Co として児童一人一人の成長のために、見通しや風通しのよい職場の雰囲気づくりに努め、指導体制の改善に全力で取り組んでいく。